
ハートの風船

細桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートの風船

【Nコード】

N5346J

【作者名】

細桜

【あらすじ】

少し切ない恋の話です。是非読んでください。

「淳」

教科書を鞆にしまっていた淳は、呼ばれてふり返る。

教室の前には、伸介と京子が並んで立っている。

「これから京子と祭りに行くんだけど、一緒に行かないか？ 熊野神社の」

伸介が、嫌そうに言う。

「何で？」

淳は手を止めて首を傾げる。

「三人の方が楽しいでしょ？ 私、親の手伝いをしなくちゃなんないから、楽しみたいの」

京子は言う。それは、伸介に向かって言っているようにも見える。

淳は伸介を見る。来るな、と目が訴えている。

「……今日は用があるんだ」

淳が言うと、伸介は満足げにニンマリとする。

「分かった。それじゃあな」

伸介は片手を上げると、京子の肩を抱いて教室から離れる。

「あ、じゃあね。淳君」

京子は慌てながら言って、バイバイと手を振る。

淳は京子の姿を目で追う。が、壁で直ぐさま見えなくなる。帰り支度を再開する。

「似合うよな。あの二人。もうそろそろ付き合い出すんじゃないか」

淳の肩に腕を回して、勝俣が言う。

「……そうかもな」

「きつとそうだよ。女子人気一位の伸介と、男子人気一位の京子ちゃん。羨ましいよな。あ、ちなみに俺は十位」

勝俣は胸を張って自慢する。

「お前は三十五位だぞ」

「何人中だよ」

「七十人中。学年全体の丁度真ん中だぞ。ミスター平均君」

「うるせ」

淳は苛立って勝俣の腕を押しつける。

「伸介と一緒にだと、お前は引き立て役でしかないもんな。だから一緒に行きたくないんだろ」

勝俣は大口を開けて、ガハガハと笑う。

「うるせえ！」

不愉快な顔をして、淳は怒鳴る。

「まあまあ落ち着け。それじゃ十位の俺と祭りにいかないか。金魚すくいに行って京子ちゃんのはつぴ姿を拝みに行こうぜ。見るのは誰でも許させるんだから」

「俺は行かないよ」

淳は鞆を背負って教室を出た。

家に着く。

「淳」

家に入る時、背後から声を掛けられた。ふり返ると、塀の外に伸介が立っていた。

「さつきはありがとうな。俺の意図を読んでくれて」

伸介は塀に腕を乗つけて笑いながら言う。

「俺、今日京子に告白するつもりなんだよ」

「……そう」

「それじゃあな。行ってくる」

伸介は、よし、と気合いを入れて去って行った。

淳は、その後ろ姿をただジッと見ていた。

家に入り、自分の部屋に行く。

机の上には、写真立てがあつた。京子と淳が並んで移っている。けれど、その写真は切り取られているものだ。それを、パタンと見えないように倒す。

二年後。淳は高校生になって、初めて熊野神社の祭りに来ていた。祭りには大勢の人が楽しそうにはしゃいでいる。淳は金魚すくいの屋台で、すくいを待っている金魚を見ていた。

「淳じゃねえか」

勝俣は、よッ、と片手を上げて淳に言う。隣には、見覚えのない女性がいる。

「久しぶりだな」

「二年ぶりか」

淳は、勝俣の隣の女性を見る。

その視線に気付き、

「こいつは俺の彼女」

と勝俣が紹介する。彼女は、初めまして、と頭を下げる。大人しそうな子だ。彼女は手に金魚が入ったビニール袋を持っていた。中には二匹の金魚が漂っている。その袋には、青い色の丸い風船がヒモで繋がれていた。

「お前はまだ一人みたいだな。なんてったって三十五位だもんな」

勝俣は額に手を当ててわざとらしく辺りを見渡して言う。

「昔のことだろ」

「お前も京子ちゃんの見に来たのか」

勝俣は淳の耳元で、彼女に聞かれないように言う。

京子の名前を聞いて、淳の胸が高鳴る。

「見ておいた方がいいぞ。一段と綺麗になってる」

「彼女いるのにいいのかよ」

「彼女が金魚欲しいって言うからいったんだよ」

「確かに。それじゃ仕方ないな」

淳は頷く。

「行っって見てこいよ」

勝俣は淳の肩を叩くと、彼女と手を繋いで去って行く。

「行ってみるか」

すぐ目の前にある金魚すくいを後にして、京子がいる金魚すくいを捜す。京子の両親は祭りの時金魚すくいをやっていて、京子も親の手伝いをしている。

お目当ての金魚すくいを見つける。淳は店前に行く。

「いらっしやい、って淳君」

淳に気付いた京子は驚いて目を丸くして言う。

「久しぶり」

淳は京子を見る。勝俣の言つとおり、前よりも綺麗になっていた。店の前を通る男たちも、通り過ぎざまに京子を見る程だ。

「二年ぶりだね。会うのも、話すのも」

京子は髪をかき上げる。はっぴ姿がよく似合っている。はにかむように笑う顔が可愛い。

確かに彼女と話すのは二年ぶりだった。伸介が告白すると言った日以来、京子と話せずにいた。

「やる？ 金魚すくい」

彼女はポイを手に持つ。

「一回やるよ」

淳は二百円を京子に渡して、ポイを受け取る。しゃがんで、腕を片手に、ポイをもう片手にして金魚を狙う。

「今どこの高校言ってるの？」

京子は淳と同じようにしゃがんで言う。

「直ぐ近くの熊野高校だよ。そっちは？」

一匹の金魚に狙いを付ける淳。後ろからポイで追う。

「猫野高校よ」

京子も、淳が狙っている金魚を目で追う。

「伸介と同じだよな」

「ええ」

「よしッ！」

金魚が止まった隙を狙い、すくう。持ち上げたまま、ゆっくりと

腕の上へと持っていく。落とす。

「おめでとう」

京子は手を叩いて、淳が取ったことを喜ぶ。

「よっしゃ！ もう一匹」

次の金魚を狙い、すくう。けれども、ポイは破れ、金魚は落ちてしまう。

「さすがに二匹は無理か。一匹でいいや」

淳は腕を京子に差し出す。

「一匹じゃ可哀想よ。サービスしてあげる」

京子は網で金魚をすくう。二匹の金魚を袋に入れる。

「いいの？ ありがとう」

「ちよつと待つてね。今風船のサービスしてるから」

京子は店の奥にいくつもある丸い風船の下から、膨らませていない風船を選ぶ、慣れた手つきで空気を入れる。その風船は、ハートの形をした風船だ。ハート型の風船を選んで金魚を入れた袋に結ぶ。袋の取ってから風船のヒモが付いていて浮かんでいる。

「はい」

京子はそれを淳に渡す。

「ありがとう」

淳は、プカプカと浮かぶ風船を見る。ハートの風船を持って一人で歩くのは少し恥ずかしい、と淳は思った。

「どういたしまして」

二人は黙ってしまった。妙な沈黙が流れる。

「……それじゃね」

先に言っただのは淳。

「……うん。またね」

京子は何故か寂しそうな顔で言う。

淳は後ろ髪を引かれる思いで立ち去る。後ろから、いらっしやいと彼女の威勢の良い声が聞こえる。

一度もふり返ることなく、淳は歩く。京子の店が見えなくなった

頃、正面から伸介が歩いてきた。

淳と伸介の目が合う。

「久しぶりだな淳。お前も祭りに来てたのか」

伸介が言う。あの日から、伸介と京子には出来るだけ会わないようにしていたし、話しかけもしなかった。けれども、今はそんなことはない。

「その風船、やっぱり京子の所に行ってたのか？」

伸介はニヤニヤとした顔で言う。その隣には、女性がいる。

「そうだけど。彼女は誰？」

淳は、伸介が何故ニヤニヤとしているのか首を傾げる。

「俺の彼女だ」

「ねえ、あたし焼きそば食べたいんだけど」

不満そうな彼女の声。

「先に行つて食つてろ。俺はこいつと少し話すから」

「早く来てね」

そう言つて彼女はそくさと雑踏に消えていった。

「……お前、京子と付き合つてたんじゃないの？」

「え？」

伸介は目を見開いて驚いている。

「何言つてるんだよ。お前が京子と付き合つてるんだろ？」

「何変なこと言ってるんだよ。お前告白したんだろ？」

「したけど、振られたよ。思い出させるなよ」

伸介の言葉に、淳は混乱する。てつきり、二人はあの日から付き合っていると思っていた。「そんなこと聞いてないぞ」

「当たり前だ。あれから俺、お前と会わないようにしてたからな」

「？……なんでだよ」

自分がそうするのは普通だと思うが、何故伸介がそうするのか分からなかった。

「振られた彼女と付き合っているお前と話したくなかったもん。けれど、今はそんなことないぞ。何てったって彼女がいるからな」

「ちょっと待て！ 俺は京子と付き合っていないぞ」

片手を広げて突き出して、淳は言う。

「何言ってるんだよ。俺に気を遣わなくてもいいぞ」

淳の言葉が面白かったのか、伸介は吹き出して笑う。

「だって、京子はお前のことが好きだって言っただぞ。もう俺行くぞ。彼女待たせてるから。近いうち遊びに行くよ」

伸介は楽しそうにそう言うと、彼女が向かっていった方へと消えていった。

淳の中では、伸介の言葉が乱反射していた。二人は付き合っていないかった？ しかも、京子が俺のことを好きだった？

「……」

二匹で仲良く泳いでいる金魚を見る。視線を上に向かすと、ハートの風船がプカプカと浮いている。

そういえば、いくつも丸い風船があったのに、この風船はわざわざ膨らませていた。勝俣の彼女が持っている風船は丸い風船だった。もしかしたら、これも何かの意味があるのではないか？

そう考えて、淳は京子の店の方を見る。

淳はしばらくその場で立ち止まると、京子の店とは反対の方へと去って行った。

淳は、神社の入り口に立っていた。

「おまたせ」

一人の女性が近づく。

「待った？」

「全然。待っている間に、里沙が欲しがっていた金魚取っておいたよ」

淳は、恋人に二匹の金魚を差し出した。

それには風船は付いていない。

今頃、あのハートは空を漂っているのだろう。

終わり

（後書き）

読んでくれてありがとうございます。よかったら、感想を聞かせてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5346j/>

ハートの風船

2010年10月8日15時26分発行